

氏名（本籍）	稲 永 努（福岡県）
学位の種類	博士（臨床心理学）
学位記番号	博甲第53号
学位授与年月日	平成28年3月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	不登校児との信頼関係構築を重視した「家庭訪問援助モデル」－「関係性変容過程仮説に基づいた援助方法」を基礎として－
論文審査委員	主査 東亜大学大学院 教授 村 山 正 治 副査 東亜大学大学院 淳教授 桑 野 浩 明 副査 東亜大学大学院 准教授 上 藺 俊 和

論文内容の要旨

不登校児への家庭訪問では、援助の過程において、家庭訪問が中断する、子どもとの信頼関係を深まらなくなる、あるいは援助者が家庭訪問の目的を見失う、援助の見通しを持ってなくなることも多いが、このあたりの困難さをカバーできる援助モデルはこれまで確立されてこなかった。

そこで本研究では、「関係性変容過程仮説に基づいた援助方法」（稲永，2011など）を基盤として、(1) より一層分かりやすく、学校教員などにも使いやすくなるような「家庭訪問援助モデル」を構築すること（第3部）、(2) 「家庭訪問援助モデル」の有用性と留意点について整理すること（第4部）、(3) 家庭訪問の導入前後における母親面接の役割変化と不登校支援ネットワークの変遷について考察すること（第5部）を目的とする。これらの研究目的を達成するため、家庭教師カウンセラー2事例とスクールカウンセラー3事例の計5事例（A～E）を用いた。

(1) 「家庭訪問援助モデル」の構築

「家庭訪問援助モデル」は、子どもと援助者の関係性変容過程を示した「関係性変容プロセス」と、「3つの援助方法」から構成される。「関係性変容プロセス」は家庭訪問の始まりが起点となっており、①「自己愛世界への『同化』」からスタートする。この段階は、援助

者が子どもの「自己愛世界」を積極的に理解しようとすることを通して、子どもと「同化」した状態（関係性）へと向かう段階と言える。ここでの二者関係は、②「信頼関係の深まり」を経て、子どもと援助者の間に主訴や共通の話題を挟んだ三者関係へと移行する。この段階において主訴の共有が可能となり、子どもが今後社会に出ていくために必要な核心的な課題について両者で話し合っていく（③「向き合いの状態」）。そして、③「向き合いの状態」と④「自尊感情の定着」は折り重なるように進行していくというプロセスになる。

つづいて「3つの援助方法」とは、「『同化』アプローチ」、「向き合い」、「自尊感情の支持」から構成される。「『同化』アプローチ」は、援助者の趣味や関心領域はひとまず排除し、子どもの「自己愛世界」を探索しながら積極的に「同化」していく方法と言える。「向き合い」は、社会適応上必要と思われる子どもの発達課題を援助者自身が向き合うことで吟味し、その子に合った形で提供することと定義される。「自尊感情の支持」は、子どもが新たにチャレンジしたことを自発的に語る時、あるいは援助者と共にふり返る時に、子どもができるようになったことを援助者がしっかりと受け止めてほめる関わりである。

また「家庭訪問援助モデル」を導入する前段階として（1）「ネットワーク（NW）による援助」（田嶋，2010）、（2）導入のタイミングとチェック、（3）訪問者・立場の選択、（4）家庭訪問導入期を導入プロセスとして設定した。

（2）「家庭訪問援助モデル」の有用性と留意点

事例Bを用いて「家庭訪問援助モデル」が不登校児に果たす役割を検証したところ、（a）未発達な自我から葛藤できる自我へ、（b）自己愛的・依存的コミュニケーションから三者関係的・自立的コミュニケーションへ、（c）社会的スキルの向上という3側面における本児の心理的成長・変容が確認された。これらの変容に対し、「『同化』アプローチ」は（b）自己愛的・依存的コミュニケーションに「同化」し、子どもとの関係構築を円滑にする役割と、主訴の共有が難しい家庭訪問において、子どもが社会適応に向けた課題と「向き合う」土俵に立てるようにいざなう役割を果たすと言える。また、「向き合い」は（a）葛藤できる自我形成と（c）社会的スキルの向上を促進し、「自尊感情の支持」は子どもが獲得した（c）社会的スキルの強化と自尊感情の定着を助けることが示された。

さらに、「『同化』アプローチ」に関する留意点、「向き合い」に関する留意点、そして学校教員による活用も視野に入れた留意点についても考察した。

（3）「家庭訪問援助モデル」を取り巻く不登校支援ネットワーク

子どもへの家庭訪問と並行して母親面接を実施する場合、家庭訪問の導入前後では母親面接の役割が変化すると考える。事例Eを用いて検討した結果、導入前の母親面接の役割は、母親への助言・支持・共感と父親との協力模索であった。導入後の母親面接の主たる役割は

、子どもとの信頼関係が順調に深まっていく場合は母親との情報交換になるが、深まりにくい場合には、母親との協働による「向き合い」へとシフトすることも有効であることが示唆された。

また事例Cを用いて、学校・母親・関係機関を含めた不登校支援ネットワークの変遷について検討した。その結果、家庭訪問期・保健室登校期・教室復帰後では、学校教員と子どもとの関係や、母親とスクールカウンセラーとの関係、関係機関と学校との連携などにおいて、図9が示すような変化が確認された。

以上を踏まえ、今後は「家庭訪問援助モデル」の汎用性向上と、学校教員や学校関係者にも使いやすい援助モデルにしていくことが課題である。

論文審査の結果の要旨

本論文は五部構成である。A4 9 8 枚の力作である。内容は第1部 不登校児への援助モデル論 第2部事例 第3部 家庭訪問援助モデルの構築 第4部 家庭訪問援助モデルの有用性と留意点 第5部 家庭訪問援助モデルを取り巻く不登校支援ネットワーク論である。

第1部は論文全体の序論でもある。1章で不登校児の援助モデルを概観、整理している(1章)。2章では著者が臨床事例研究を基礎にして開発した独創的4段階のプロセス援助論「関係性変容過程モデル」の意義を他の不登校児援助モデルとの相違と特徴を論じ、著者のモデル論の位置付けを明確にしている(2章)。さらに3章では、本研究の中心であり、このモデルをさらに発展させている「家庭訪問援助モデル」を創案し、その構築過程、有用性、臨床的留意点や今後の発展可能性を展望することが本研究の目的であることを論じていて明快である。

第2部は「家庭訪問援助モデル」構築の基礎になる5事例の臨床事例の詳細な記述である。A事例(中2、90回面接)、B事例(高1、110回面接、)C事例(中2、24回)、D事例(中1、16回)E事例(中1、30回)の詳細な経過記録である。これを読むと、各事例に応じて、学校長、学校教師、母親面接、児童相談所などとの接触を必要に応じて活用している柔軟な対応を見せていて、著者がすぐれた実践家であり、心理臨床家、カウンセラーであることが見て取れる。プロセスモデル研究仮説は、このように優れた臨床実績を挙げる過程

で生まれてくる創造的な仮説であることを強調し、高く評価したい。

3部は家庭訪問援助モデルの内容の説明と独自性の検討である。

家庭訪問援助モデルはクライエントの変化過程を「関係性変容モデル」 それに対応するカウンセラーの「3つの援助方法」から形成されているところに特徴がある。変容過程は、①自己愛世界への同化 ②信頼関係の深まり ③向き合い状態 ④自尊感情の定着 の4段階のプロセスを設定している。また援助方法は、①同化へのアプローチ ②向き合い ③自尊感情の支持の三つの方法を設定している。

変容過程の各時期の特徴に対応する援助方法について、具体的な事例を取りあげて、説明しているのでこの方法の特質がよくわかるし、利用しやすい記述である。

4部はこの援助モデルの臨床適用に関する有用性と注意すべき留意点を述べている。有用性では、このモデルで不登校児が自分の葛藤を明確化したり、依存的コミュニケーションから自律的コミュニケーションへ移行する動き、さらに社会的スキルの向上など不登校児の心理成長が生まれてくるなどの有用性が見られること。自己愛世界にカウンセラーが寄り添うことで、不登校児の世界が理解され、そこから自分との向き合いが生まれてくること、さらに自尊感情の定着などが展開して、変化するプロセスが事例を交えて生き生きと例証されていることは貴重な業績である。

5部では このモデルの展開には、母親面接の必要性や 家庭訪問、親面接、学校教員、教育委員会 適応指導教室、などネットワーク支援の視点を常に念頭に置いておき、状況変化に応じて、援助形態を変化させていく必要性を論じている。最後に展開した一事例でその具体的例を提示して、その有効性を例証してしめくくっている。

本論文の成果と評価

①来談しない不登校児の援助に役立つ新しい「不登校児の家庭訪問援助モデル」を創案した成果を高く評価できること。これまで散発的に家庭訪問支援が行われていたのを、「プロセスモデル」として家庭訪問プロセスを連続過程としてとらえて理論化し、システムチックに家庭訪問援助を実施できるようにしたプロセス理論作成の功績は大きいものがある。

②著者自身による5事例の不登校児の家庭訪問援助モデルの臨床事例研究の実際例を提示できていることは、高く評価できるものである。つまり成功事例の提示は、著者がこの種の研究を可能にできた優れた臨床実践能力も持っていることを証明するものだからである。

③このモデルを教師やカウンセラーが訪問面接を実施す際の面接過程と段階に応じた援助

法の選択を可能にする有効なガイドラインとなることができる。訪問面接の重要なアセスメントに役立つ意義は大きい。

④今後の課題 扱った事例が男子中学生に限られているので、今後女子中学生の事例にこのモデルを活用して、例証できれば、このモデルのさらなる展開可能性が広がるであろう。

公聴会の結果

本論文お公聴会は平成28年2月16日に行われた。論文提出者の発表後、審査員によるコメント、質問、助言があった。これらに対して、論文提出者から、適切な説明がおこなわれ、質問への回答も納得がゆくものだった。

以上から、本論文は、博士(臨床心理学)の学位を授与するに値するものと認める。